



モンゴル国における仏教復興と尼僧：バクラ・リン ポチェの役割と伝統の再移植

伊藤，友美

(Citation)

国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 31:63A-110A

(Issue Date)

2008-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000836>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000836>



モンゴル国における仏教復興と尼僧 ーバクラ・リンポチェの役割と伝統の再移植ー

伊藤 友美

はじめに

2008年7月1－5日、モンゴル国ウランバートルにて、第10回サキャディター国際女性仏教徒会議（以下、「サキャディター会議」と略称する）が開催された。7月1日、サキャディター会議の開会式は、ウランバートル中心部にあるスフバートル広場に面した中央文化会館（Central Palace of Culture）にて行われた。130名ほどの海外からの参加者に加え、民族衣装に身を包んだモンゴル人女性を中心とする多数の現地参加者が来場した。スフバートル広場で群れをなす人々の間には、騒然とした空気があることを感じられたが、会議参加者には異変が知らされることなく開会式が進行した。折しも、7月1日夜には、6月29日のモンゴル国民大会議（国会）総選挙結果をめぐり、与党・人民革命党に対する抗議行動が激化し、モンゴル国では異例の暴動に発展していた。抗議の群集の一部が与党・人民革命党の本部ビルに放火し、ビルはほぼ全焼、市民4人が死亡、500人が怪我、480人が警察当局によって逮捕された¹。しかし、翌朝には市内は平静を取り戻し、その後のサキャディター会議も、ウランバートル郊外ガチョールトにあるホテル・モンゴリア（Hotel Mongolia）で、政局混乱の影響をほとんど受けることなく進行したと言ってよい²。同会議には、日本から曹洞宗・愛知専門尼僧堂の青山俊董老師、六波羅大仙師、佐々木悠樟師、また日本人研究者としては岩本明美氏（仏教文献学）、Yumi Onozawa氏（仏教文献学）、および筆者が参加した。また、アジア・欧米各国から多数の尼僧・在家修行者・研究者が参集し、現地のモンゴル人女性および男性も参加して、英語・モンゴル語・中国語・韓国語などの同時通訳を通じて熱心に研究発表に聞きいった。また一般仏教信徒向けのワークショップ（10名程度のグループ・ディスカッション）でも、ボランティアによる通訳を介して、積極的な意

見交換が行われた。主催者の説明によると、仏教に関してこれほどの規模の国際会議は例のなかったことであり、モンゴル人仏教徒にとって非常に誇らしく刺激に満ちた経験であったという。



【写真① サキャディター会議開会式会場前】

サキャディター国際女性仏教徒会議は、仏教各派の女性に関する問題について話し合う半学術的・半実践者向けの会議である。同会議は、1987年以降、ほぼ2年に一度の頻度で、研究者および出家・在家の仏教実践者が研究成果ないし自身の宗教実践に関する経験に関する発表を行ってきた。同会議には、非研究者の宗教者向けのプログラムも多数盛り込まれているものの、「仏教と女性」というテーマに関心を持つ文献学・文化人類学等の多様なディシプリンの研究者が研究成果を持ち寄り発表する貴重な場である。また、アジア・欧米各国から仏教各派を代表する尼僧および仏教実践者が、その経験・知見について発表・意見交換を行う場でもあるので、研究者にとっては、現代仏教徒女性の運動に参加し、その関心事を共有できる機会でもある。特に、サキャディター会議では、現代まで男女の具足戒が継承されている東アジア仏教と比べ、女性の具足戒が継承されなかった上座部仏教とチベット仏教では、相対的に尼僧たちの社会的地位が低いことが指摘され、上座部仏教・チベット仏教における具足

戒授戒の再開に向けた議論が重ねられてきた³。

筆者は、これまでタイ上座部仏教における女性修行者・比丘尼サンガ復興運動について研究しており、2002年以降、サキャディター会議においても研究発表を行ってきた⁴。そして、同会議を通じて、タイの上座部仏教だけでなく、スリランカの上座部仏教、チベット仏教においても同様の問題が存在し、その克服に向けた運動が相互に連携していることを知り、現代における仏教諸派における女性の問題について視野を広げる機会を得た。女性の具足戒の継承が途絶え、「比丘尼」としての出家が許されていない仏教諸派の伝統に属する国では、多様な形態の尼僧が生まれ、それらの尼僧たちは、具足戒を受けた男性僧侶「比丘」と比較すると、恵まれない社会条件の下で、それぞれの出家生活・宗教実践を重ねている。それ故、チベット仏教の伝統に属するモンゴル国における尼僧の現状は、筆者にとって非常に興味深い問題であった。また、筆者は、過去にタイにおける学生運動・共産主義運動における仏教徒の宗教的葛藤、カンボジアのポル・ポト政権下における仏教弾圧とその後の復興について研究した経験を有する（Ito 2001, 2003；伊藤2004）。そのため、社会主義政権の成立に際して大規模な仏教僧・寺院の粛清が行われ、以来70年以上にわたって宗教活動に大きな制約が設けられてきたモンゴル国で、1990年の「民主化」以降進展してきた仏教復興は、筆者にとって特に関心のある問題であった。今回のサキャディター会議では、モンゴル国の仏教に関して、こうした筆者の関心に応えるスピーチや発表を聞き、参加者と意見交換を行った。

民主化後のモンゴル国仏教復興と尼僧に関する研究は、石濱裕美子氏、嘉木揚凱朝氏らによるモンゴル・チベット仏教についての重厚な歴史研究と比べると、必ずしも充実しているようには見えない。近年のモンゴル国における仏教復興は、棚瀬（1996）において考察されている他、モンゴル史ないし密教を専門とする研究者によるいくつかの一般向けの概説書、紀行文、講演録、現地報告等の中で紹介されている⁵。例えば、中村（1998：65, 1999：94-96）、棚瀬（2000：22-23）、菅沼（2004：33-35）、ロッサビ（2007：255）には本稿で取り上げるバクラ・リンポチェ（第19世バクラ・ロプサン・トゥブテン・チョグノ

ル [19th Bakula Lobzang Thupstan Chognor; 1917–2003]) や尼僧院に関する記述も含まれており、わずか10日間のモンゴル国滞在の間、会議の合間に筆者が見聞したことが、研究者の間で全く知られていないわけではないことがわかる。しかし、先行研究の記述は、モンゴル国仏教徒にとってのバクラ・リンポチェという人物の重要性を十分に伝えておらず、また「尼僧」と総称される宗教実践・儀礼を行う女性たちの具体的な様態・経験について、ほとんど触れていない。

以下の論考において筆者が依拠している主たる資料は、モンゴル国におけるチベット仏教の復興において極めて重要な役割を果たしたバクラ・リンポチェの生誕91周年記念文集（英文・モンゴル語文併記）、30年近くにわたってリンポチェの秘書を務めてきたソナム・ワンチュク・シャクスポ（Sonam Wangchuk Shakspo）が著したリンポチェの伝記（英文）、2000年以降、モンゴル国における仏教復興を支援してきた国際仏教団体 FPMT（Foundation for the Preservation of the Mahayana Tradition）のモンゴル国代表ウエリ・ミンダー（Ueli Minder）およびインド留学経験のあるモンゴル人沙弥尼（ゲツルマ）クンゼ師（Thubten Kunze）に対し英語で行ったインタビューである⁶。筆者のモンゴル国訪問・滞在は、本来、サキャディター会議における研究発表と会議プログラムの参加を目的としており、調査を目的としたものではなかったため、これらの資料は極めて限定的であり、一面的である可能性を否定できない。しかし、研究者だけでなく宗教実践者を交えた会議を通じて、わずかながらも現代モンゴル国の仏教を支える宗教的情熱に触れ、筆者なりに学んだ点をここに書きとどめたい。

1. 背景

20世紀初頭のモンゴルは、ロシアと中国の狭間で自治・独立を模索し、結局、1921年、ソビエト政府の支援を受けたモンゴル革命家たちが権力を掌握し、ソビエト型の近代国家建設の道を選択した。そして1928年、スターリンがソ連で階級闘争を強化し、「保守主義者」の排斥を進展させると、モンゴル人民革命

党もその方針を踏襲した。富と権力を持った僧侶たちは「封建諸侯」に分類され、その財産（家畜）は没収対象とされた（棚瀬2000：18-19；バトバヤル2002：47-54）。1930年代には、ほとんどの僧院が破壊され、16,000人から17,000人の高僧たちが殺害されたという（バトバヤル2002：57）。その後、社会主義政権下のモンゴル国では、ウランバートルにあるガンダン寺を除き、すべての寺院が閉鎖され、宗教活動が許されない時代が70年間にわたって続いた（松川1998：89）。

1989年11月のベルリンの壁崩壊の後、社会主義諸国民主化の流れはモンゴル国にも波及した。1990年、モンゴル国では人民革命党中央委員会政治局全員が辞職し、複数政党制の採用が決定され、暴力行為を伴うことなく、民主化が実現した（小長谷2007：13-14）。モリス・ロッサビによると、1990年以降は、宗教を否定するプロパガンダがなくなり、何ヶ所かの寺院が再開されるようになったという。そして、2001年の試算では120ヶ所の寺院が再興され、3,000人の僧侶がいるというデータを紹介している（ロッサビ2007：223-224）。

1920年代末から1930年代にかけての仏教弾圧と、1990年代以降の仏教復興の状況をモンゴル国の人々は、どのように見ていたのだろうか。ロッサビの著作は、恐らくモンゴル国における民主化とその後の社会変化を最も詳細に記述したものの一つであると考えられるが、同書は仏教に対する人々の懐疑的見解を中心に紹介している。「1920年代終わりから1930年代にかけて社会主義政権が寺院を攻撃した際、一般大衆から大きな反対の声は上がらなかった。（中略）仏教界がその全盛期に特権と階級制度、難解な理屈をふりかざして抑圧を繰り返したために、人々の心は離れていた。」（ロッサビ2007：223）また、1990年以降の宗教復興の状況については、宗教界の資金運用に対する疑問の声を紹介しながら、次のように述べている。「仏教の階級に対する不正や非道徳行為が告発されたことにより、仏教団体への支持が失われた。信心深い仏教徒でさえ、多くの僧侶が読経などの儀式に多額の礼金を要求することに不満を述べている。（中略）民主改革派の中には、巨大な仏像と盛大な儀式への多額の出費は、貧困に苦しむ大多数の国民を思えば不適當だとする声もあった。いずれにせよ、

首相ナムバル・エンフバヤルの仏教への関心が薄かったせい、寺院の修理や再興に少額の予算しか充てられなかった。」(ロッサビ2007:224)

これらの記述は、恐らく現代モンゴル社会に存在する仏教界への不満を反映したものであると考えられるが、1990年以降の仏教復興がモンゴル人仏教徒の仏教に対する信仰心に裏打ちされることなく行われたとも考えにくい。ロッサビが指摘するように、1990年から2001年までの間に再興された寺院120箇所、僧侶3,000人という数値は「社会主義以前と比較すれば取るに足りない数」(ロッサビ2007:224) かもしれないが⁷、70年間にわたり規制されてきた宗教活動が突然自由化され、仏教徒の側にも、政府の側にも、その自由にどう対応すればよいのかかなりの戸惑いが存在したため、その数が伸び悩んだものと推察される⁸。少なくとも、本稿の依拠する資料は、仏教復興に対するモンゴル人仏教徒の熱狂的な歓迎ぶりを伝えており、モンゴル国の仏教復興がある一人の活仏と彼に深い信頼を寄せるモンゴル人仏教徒たちによって実現されてきたことを示している。



【写真② バクラ・リンポチェ伝記(左)・生誕91年記念文集(右)】

2. 1990年以降の仏教復興とバクラ・リンポチェの役割

その活仏バクラ・リンポチェは、モンゴル人ではなく、モンゴル語を話すこ

ともできなかったが⁹、モンゴルの伝統宗教であるチベット仏教の高僧であり、20世紀初頭のモンゴルに伝わっていた「予言」を体現する人物として迎えられた¹⁰。彼は、1990年代のモンゴル国における仏教復興の事業において指導的役割を果たし、その功績が顕彰され、2001年にモンゴル大統領から「北極星賞」(Altan Gadas; Polar Star Award) が贈られている。バクラ・リンポチェは、1968年以降、定期的に共産党政権下のモンゴル国を訪問してモンゴル国の仏教徒に励ましを与え、1989年末、政変を迎えようとしているモンゴル国に、インドの駐モンゴル国大使として、僧形のまま派遣された。その後、10年間にわたって大使としての職務を務め、2000年にはインドに帰国したが、彼は、2003年11月にこの世を去るときまで、モンゴル国の人々から「大使先生」(“Elchin Bagsha”; Ambassador Teacher) と呼ばれて慕われ、エイフタイヴァン(平和)通りを行き交う人々が、インド大使館に向かって拝礼することも珍しくなかったという(Sonam 2008: 7; n.d.: 8, 11)。彼の死の5年後に刊行された『バクラ・リンポチェ生誕91年記念文集』には、チベット仏教・モンゴル仏教界の指導者ばかりでなく、N・エンフバヤル(N. Enkhbayar; 2000-04年首相、2005年-現在大統領)やP・オチルバト(P. Ochirbat; 1990-97年大統領)、Ts・ゴンボスレン(Ts. Gombosuren; 1988-96年外相)など、モンゴル政界の指導者がそれぞれ数ページにわたる長文を寄稿していることから、これらの人々がリンポチェに寄せた信頼の大きさが伺われる¹¹。同文集の中で、ガンダン寺住職(Khambolama)のD・チョイジャムツ(D. Choijamts)は、「我々にとって、バクラ・リンポチェは決して外国人ではなかった。彼は我々のグル(師)だった」と述べている¹²。

2- (1) バクラ・リンポチェの略歴

72歳で僧形のままインド大使としてモンゴル国に派遣されたという経歴もさることながら、バクラ・リンポチェの生涯は、それ以前の経歴も非常にユニークである¹³。バクラ・リンポチェは、1917年、チベット仏教を伝統とするラダック王国の王子として生まれた。ラダックは、現在のインド領の北端ジャンムー・

カシミール州のヒマラヤ山脈地域に位置し、文化的にはチベット文化圏に属している。幼き王子は、釈迦牟尼ブッダの直弟子であった16人の阿羅漢の一人羅漢バクラの第19代目転生として見出され、6歳のとき、その転生はダライ・ラマ13世（1876年生まれ；在位1878－1933年；現ダライ・ラマ14世の先代）によって認定された。10歳のとき、ダライ・ラマ13世治下のチベットのラサに赴き、そこで14年間、高度な宗教教育を受けた。その間、ダライ・ラマ13世によって幼年者向けのラブジュン（*rabjung*）出家の儀礼とロサン・トゥプテン・チョグノー（*Lobzang Thupstan Chognor*）の名を授かった他、ダライ・ラマ14世の摂政であったレティン・リンポチェ（*Rating Rinpoche*）によってゲロン（*dge-slong*; 比丘）出家を果たし、さらに1940年にはダライ・ラマ14世はじめチベットの高僧が臨席する中でゲシェ・ルハランパ（*Geshe Lharampa*）の学位を取得するという榮譽に浴している（Sonam n.d.: 1-3）。

僧侶としての学業を修め、ラダックに戻った後には、ラダックの権益を守るため、僧侶でありながら政治家としても活躍し、ジャンムー・カシミール州政府の大臣（a minister in J&K Government）、ラダック初のインド国会議員（the first MP from Ladakh）、全インド少数者委員会委員（a Member of National Commission on Minorities）などを務めた。ヒマラヤ山脈地域にあるラダック住民の権益が中央の政治家に十分な理解を得られていなかった中、バクラ・リンポチェは、インド首相ネルーらとの親交を深め、インド政府にラダックの地政学的意義を認めさせることに成功したといえる。バクラ・リンポチェは、ラダックの人々にも愛され、「ラダックのガンディー」（Gandhi of Ladakh）、「現代ラダックの設計者」（Architect of Modern Ladakh）と讃えられた（Sonam n.d.: v-vii, 4-7）。政治家としての名声を博していたにもかかわらず、バクラ・リンポチェは常に僧衣を着用し、腕時計などの高価な装飾品で身を飾ることは決してなかったという（Sonam n.d.: 11-12）¹⁴。政治家や大使としての職務を果たしながらも、戒律（*vinaya*）を守り、仏教の教えを聞きたいと望む人に対しては仏教の教えを説いた（Sonam n.d.: 38-48）。モンゴル国における仏教復興への寄与を待つまでもなく、バクラ・リンポチェはインド・ラダックに

において、すでに歴史的役割を果たしていた人物であるといえよう。

2－（2）モンゴル国との関わり

では、なぜバクラ・リンポチェはモンゴル国との関わりを持つようになったのであろうか。ソナムによると、リンポチェは、1930年代にチベットのラサで僧侶としての研鑽を積んでいた頃、モンゴル国やブリヤート出身の僧侶から、モンゴル国・ソ連で起こっていた仏教弾圧について聞き、これらの国の人々のために何かしたいと強く感じたという。やがて、1959年以降、ダライ・ラマ14世はじめ、多数のチベット人が亡命生活を強いられるようになる中、「他のチベット仏教の僧侶たちは西洋で仏法を広めるために西洋を目指したが、バクラ・リンポチェは彼が最も必要とされている東洋を選択した」と秘書のソナムは述べている（Sonam n.d.: 8）。

バクラ・リンポチェのモンゴル国との関わりは、インド大使として赴任した1990年に始まったものではない。1968年、バクラ・リンポチェは、初めてブリヤート、モンゴル国、中国をはじめ、ソ連と中央アジアの一部を訪れ、これらの地域における宗教生活の破壊を目にした¹⁵。同年、彼は、ガンダン寺住職S・ゴンボジャブ（S. Gombojav）およびソ連仏教徒の代表ゴンボエフ（Gomboev）らとともに、「平和のためのアジア仏教徒会議」（Asian Buddhist Conference for Peace; 略称 ABCP；本部ウランバートル）の創設者の一人となり、以来、ABCPの会議に出席するため、定期的にソ連のブリヤートとモンゴル国を訪問するようになった（Sonam n.d.: 8, 10; D. Choijamts 2008: 44-45）。1969年当時、ガンダン寺の仏教研究所の学生だったD・チョイジャムツ（現ガンダン寺住職）によると、社会主義時代の1970－80年代、バクラ・リンポチェの訪問はモンゴル国の人々が過去の宗教的なつながりを保持するのを助けたという。「モンゴル国では社会主義政権下で厳しい時代と厳正な治安管理があったにもかかわらず、信心深い仏教徒は秘かに尊き我々の師バクラ・リンポチェから教えを受け、勇気付けられるという機会を見つけていた。このような機会によって、モンゴル人の弟子たちは我々のグル（師）と固く揺ぎ無い絆を結んだので

ある」と述べている（D. Chojamts 2008: 44-45；伊藤訳）。当時の様子を秘書のソナムは次のように回顧している。

「共産党政権下のモンゴル国では、オープンな宗教実践（spiritual practice）は厳格に禁止されていたにもかかわらず、リンポチェは教えを求める人々に対し、彼のホテルの部屋で教えを説いた。人々は、彼の教えや祝福を受けるため、完全な秘密裏に訪ねてきていたものだった。彼らは、時には、2～3人のグループでやってきた。一人が中に入っている間、他の者たちは周囲に警察や諜報員がいないか、外の様子を見張っていた。リンポチェの祝福を得るためにやってくる時、誰にも見られないように彼らの数珠や経文を隠し持っている人たちの中には、恐怖のあまり、そこまでする人もいたのである。多くのものは、リンポチェに会い、彼の祝福を受けるときに、喜びのあまり泣き出していた。」（Sonam n.d.: 59；伊藤訳）

無論、チベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマ14世の存在は、モンゴル国の仏教徒にとって、心の拠り所となる存在である。モンゴル国の社会主義政権が弱体化し、民族アイデンティティ復興の機運の高まりとともに、チベット仏教の復活が強く望まれるようになり、これに答える形で、1979年、1982年、1991年、1994年にダライ・ラマ14世のモンゴル国訪問が実現し、熱烈な歓迎を受けたという（石濱2004：302-306）¹⁶。1968年以降、モンゴル国などの社会主義圏において、バクラ・リンポチェが築いていたネットワークは、ダライ・ラマ14世によるこれらの国々への訪問に先駆けるものであった。バクラ・リンポチェは、ダライ・ラマと密接なコンタクトを持つ高僧の一人であり（Sonam n.d.: 45）、ダライ・ラマ14世はリンポチェ逝去の際に丁寧な弔辞を寄せている（Sonam n.d.: 92）ので、両者の活動には何らかの接点があったのかもしれないが、本稿が参照した資料では、この点は明らかではない¹⁷。いずれにせよ、モンゴル国外出身のチベット仏教の高僧たちが、宗教生活が危機に瀕した社会主義圏のチベット仏教徒を支えたと捉えることは、決して誤りではないものと思われる¹⁸。

2－（3）駐モンゴル国大使時代のバクラ・リンポチェ ①1990年政変時の精神的支柱

駐モンゴル国・インド大使就任以降のバクラ・リンポチェの役割としては、手持ちの資料に見られる中で、特に2つの点に注目したい。第一に、1990年のモンゴル国民主化政変時の精神的支柱としての役割を挙げたい。インド大使としてバクラ・リンポチェがモンゴル国に到着したのは、1989年12月31日であった（Gombosuren 2008: 65）¹⁹。それは、折しも1989年11月にベルリンの壁が崩壊して、社会主義諸国で民主化の機運が高まった時期であり、モンゴル国でも、同年12月から翌1990年1月から3月の数度にわたって民主化を要求する若者たちがスフバートル広場などでデモやストライキを行っていた時期であった（小長谷2007: 13）。当時の状況を詳細に伝えるロッサビの著作によると、1990年3月7日には、民主化を訴えるグループがスフバートル広場でハンガーストライキを開始した。広場には、ストに賛同して集う人の群れが数万人に膨れ上がっていったという。当時、1989年6月中国で民主化を求める学生などの群集が武力制圧された天安門事件は記憶に新しく、モンゴル政治局の対応にもさまざまな選択肢があり得た。しかし、ソ連による妥協の勧め、自由投票における人民革命党の圧倒的優位の確信などもあって、3月9日は政治局全員が退陣を表明、ハンガーストライキも中止、デモの群衆も解散した。そして、モンゴル国は激しい暴力を伴うことなく複数政党制の採用と自由投票の実施といった民主化を進めていくことになったのである（ロッサビ2007: 52-58）。

この政変における仏教徒のグループの関与について、ロッサビの著作は断片的に触れているに過ぎない²⁰。彼らの歴史的役割の度合いとその評価については、より綿密な調査・研究の必要があるものの、バクラ・リンポチェの伝記・記念文集は、インド大使就任早々のリンポチェに対し改革派グループがモラル・サポートを求めていることを示している。モンゴル国文化相（1992-96）、人民革命党書記長（1996-2000）、首相（2000-04）、国会議長（2004-05）、大統領（2005-08年7月現在）などの要職を歴任したナムバル・エンフバヤル氏は、激動の1990年代モンゴル国におけるバクラ・リンポチェの役割について、

次のように述べている²¹。

「モンゴル国の民主化のプロセスに積極的に関与した者を含め、若者たちは、リンポチェの指導と支援を求めた。多数の政治家とビジネスマンも師の助言を得るためリンポチェとの面会を求めている。その結果、彼らの決定や行動の多くがバクラ・リンポチェの賢明な言葉に影響を受けていたのは、当然のことといえよう。バクラ・リンポチェの助言は、シンプルでありながら説得力があり、問題を解決しようとしている者を助けることに向けられていた。」(N. Enkhbayar 2008: 34; 伊藤訳)

では、具体的にバクラ・リンポチェは一体何を行ったのであろうか。秘書のソナムによると、1990年1月4日、インドの特命全権大使としてモンゴル国会議長バトムフ(J. Batmunkh)氏に信任状を提出した際、その段階ではモンゴル国はまだ社会主義体制下にあり、信教の自由がなかったにもかかわらず、バクラ・リンポチェは、紀元前3世紀に仏教の教えがモンゴル草原に達したことから、「モンゴル初のインド大使はブッダである」と述べた。そして、大使就任の後の民主化のプロセスにおいて、バトムフ国会議長をはじめとするトップの政治指導者にも、共産主義体制に反対する若者に対しても、彼らの見解の違いを平和的手段によって解決する必要性を印象付けたという(Sonam n.d.: 62)。また、バトムフ議長との会見の際に、リンポチェは中道を見出し、平和裏に問題を解決するよう要請を行っていた。ソナムの説明によれば、「他の国であれば、大使がこうした発言をすることは、内政干渉と解釈されるところであるが、仏教国モンゴルにおいて、リンポチェは単に外国の大使ではなく、高位の仏教僧でもあった」(Sonam n.d.: 72-73; 伊藤訳)。それ故、リンポチェの言動はモンゴル社会で許容され、リンポチェ自身も恐らく宗教的・精神的指導者としての役割を自認していたと考えられる。

また、1990年2月、スフバートル広場で民主化要求のハンガーストライキが行われていた際のエピソードも興味深い。ある日、ソナムは、ハンガーストライキを行っているグループの代理と称する者からロシア語で電話を受け、リンポチェとの面会を求められた。リンポチェは、外交官として、反政府運動を行っ

ている人物を迎え入れ、その要求について議論することは適切ではないと答えたが、彼らがリンポチェの祝福を望んでいると主張したので、リンポチェは彼らに会うことに合意した。ソナムが会見の前に政治問題を持ち出さないよう求め、リンポチェも話が始まる前に自身の立場を明確にしたにもかかわらず、面会に来た5名の者は自分たちの政治的要求と戦略について話し始め、リンポチェの助言を得ようとした。結局、彼らの話しを聞き終わった後に、リンポチェは彼らの要求にコメントする立場にないとしながらも、暴力は報復と流血を招き、事態を複雑にするだけなので、闘争の追求にあたって、人々は平和的であるべきだということに何の躊躇いもない、と述べた。そして、インドを独立に導いたガンディーの闘争とモンゴルそのものの仏教伝統を思い起こすよう促した。立ち去る前に、彼らはリンポチェの祝福を求め、リンポチェはそれぞれにザンギャ (zangya) と呼ばれる「聖糸」(holy-thread) を与えた²²。そのうちの一人は、余分にもう少しザンギャを求めた。その後、ソナムがテレビで夕方のニュースを見ていると、昼間にリンポチェに会いに来たものが、ハンガーストライキをしている者たちにザンギャを配布しているところが映っていた。ウランバートル中の人たちがそのザンギャの出所を了解していた。ソナムは大使の受け入れがモンゴル国政府に拒否されることを恐れ、あわてて外務省アジア局長高官に連絡を取り、これらの者は単にリンポチェの祝福を受けに来ただけであって、政治的に解釈されるべきではないと説明した。眠れぬ夜を過ごした後、ソナムが翌朝に受けた電話は、共産党政権が民主化と自由選挙の要求を受け入れ、ハンガーストライキが終結したことを伝えるものであったという (Sonam n.d.: 72-75)。

モンゴル国における平和的な民主化の実現には、確かにロッサビが指摘しているように、ソ連による妥協の勧め、自由投票における人民革命党の圧倒的優位の確信などの要因が強く作用したであろうが、本稿が依拠している資料は、リンポチェの言葉が深く受け止められていたことを示している。エンフバヤルとP・オチルバトは、次のように述べている。

「リンポチェは、モンゴル社会のすべてのセクションから絶大な尊敬を勝ち

得ていた。リンポチェは1990年代モンゴル激変の目撃者であり、モンゴル史上の激動期を生きた人々にとってインスピレーションの源泉であった。そして我々にとって父親のような存在であった。(中略)我々は、1989年末にリンポチェが駐モンゴル国・インド大使に任命され、その直後にモンゴル国で旧習を一掃しすべてに行き渡るような変化が生じたことは、決して偶然ではなかったと確信している。他の社会主義国とは異なり、モンゴル国における民主主義への移行がこれほど平和に行われたのは、我々が仏教という遺産を継承しており、この国にリンポチェがおられたからに他ならない。リンポチェはこの大転換になくてはならない存在であり、リンポチェはその助言、支援、参与により、これらの変化において積極的な役割を果たしたのである。」(N. Enkhbayar 2008: 33; 伊藤訳)

「民主主義への移行期には、人々の心を悩ます数多くの緊張した瞬間が存在していた。モンゴル国は歴史の岐路に立っていた。なぜなら、新しい実験がなされ、それが過去からの完全な脱却と一般の人々からの肯定的な応答を持って新たな道筋を描くことを意味していたからである。当然、より良き方向に向かう変化は間近に迫っていたが、平和な移行をもたらす強い意思と決意が求められていた。バクラ・リンポチェは、人々に変化を受け入れ、理性的な振る舞いを大切にする価値観と一体となった平和・調和・良心を維持するよう助言した。バクラ・リンポチェの人間の心理学へのアプローチは、平和的で意義深い結果を生み出す望ましい変化をもたらした。」(P. Ochirbat 2008: 57-58; 伊藤訳)

2 - (4) 駐モンゴル国大使時代のバクラ・リンポチェ ②仏教復興におけるリーダーシップ

駐モンゴル国・インド大使就任以降のバクラ・リンポチェの役割として、第二に注目すべき点は、民主化後の仏教復興に向けたリーダーシップである。リンポチェのリーダーシップと支援は、1990年代の仏教復興を象徴する「事業」においても発揮されていた。例えば、1991年5月28日には、リンポチェのイニシアチブにより、70年ぶりに釈迦牟尼ブッダの生誕祭 (Buddha Jayanti) が国

立文化レクリエーションセンター (National Culture and Recreational Center) で開催され、会場が収容しきれないほどの人が詰め掛け、入り口でひしめき合う人々が警察のトラックで移送されるほどの事態になったという (Sonam n.d.: 64)。また、1993年8月に仏舍利がインドからモンゴル国に招来されたのは、リンポチュが当時文化相であったエンフバヤルに対しインド政府に公式な申し入れをするよう示唆し、実現したものであった (N. Enkhbayar 2008: 34-35; Sonam n.d.: 66-8)。仏舍利は、中央文化パレス (Central Cultural Palace) で1ヶ月間展示され、毎日数万人のモンゴル人が列を成して参詣にやってきた。エンフバヤルは、「仏舍利の招来は、あたかもブッダが我々の地に到来したかのようであった」と述べている (N. Enkhbayar 2008: 35; 伊藤訳)。この他にも、モンゴル政府が1988年以来計画・推進してきたガンダン寺の大観音像の再建に際しても、エンフバヤルはリンポチュの助言を仰いだと述べている (Enkhbayar 2008: 37)²³。これらの大事業に関して伝えられたモンゴル国の人々の熱狂振りは、70-80年ぶりの仏教復興が眼に見える形で実現されたことが社会的に大きな意味を持っていたことを示しているといえよう。

これらの仏教復興事業にもまして重要であると考えられるのは、実践的な宗教生活の回復であったと考えられる。チョイジャムツによると、政治体制の民主化により70年ぶりに宗教実践が自由化された1990年代に、モンゴル国の人々はモンゴルの文化と伝統について、ほとんど知識がなかったという (D. Chojimjams 2008: 45)。当時のモンゴル仏教徒が必要としていたものは、仏教の教えを伝えることのできる師僧の存在であったと考えられる。この点において、バクラ・リンポチュが果たした役割は、何にもまして注目し値する。とりわけ、仏教の教え普及のための活動と宗教者の人材育成の2点に着目したい。

まず、一般の仏教徒に対する仏教の教え普及のために、バクラ・リンポチュは、自ら広大なモンゴル国全土の地方巡回を行うとともに、一般向け仏教書のモンゴル語翻訳・無料配布を指示した。1917年生まれのリンポチュは、駐モンゴル国大使に着任した時点で、すでに73歳の高齢であり、大使としての職務を抱えた多忙なスケジュールの中、時間を見つけては数日間ないし数週間かけて

地方に出かけ、人々に会っていた。リンポチェは、モンゴル式のゲルに泊まり、地方の人々が供する食事を取り、信頼関係を築いた (Sonam n.d.: 63)。チョイジャムツによると、リンポチェの素朴で慎み深い人柄は、すべてのモンゴル人の心をつかみ、人々の心に仏法に対する確信とモンゴルの伝統文化を誇りに思う気持ちを引き起こしたという (D. Choijamts 2008: 45)。加えて、リンポチェは、エンフバヤルに『ブッダの教え』(*The Teaching of the Buddha*) をモンゴル語に翻訳するように助言し、そのモンゴル語版は1995年に日本で印刷され、モンゴル国の仏教徒に無料で配布されたという (N. Enkhbayar 2008: 35-36)²⁴。また、バクラ・リンポチェは、インド大使退任の前年1999年には、モンゴル国を来訪していた「大乘仏教保全財団」(Foundation for the Preservation of the Mahayana Tradition; 略称 FPMT) のラマ・ゾパ・リンポチェ (Lama Zopa Rinpoche; 1946-) と会見し、モンゴル国における仏教の振興を託したという (Sonam n.d.: 65)²⁵。

さらに、バクラ・リンポチェは、チベット仏教の伝統と宗教生活において欠かすことのできない仏教者の人材育成にも力を尽くした。新たな出家者の育成は、仏教復興に欠かすことができない事柄であり、新参出家者に戒を授けることができる地位と権威を持った高僧の存在は不可欠であった。バクラ・リンポチェは、多数の新参僧侶と尼僧に戒を授け、厳格に持戒するよう訓育した。リンポチェがウランバートル市内に設立したペトゥブ仏教学院 (*The Pethub Buddhist Institute*; のちに造営されてペトゥブ寺院が併設される) のパンフレットによると、モンゴル国における信教の自由の回復を受けて、バクラ・リンポチェは、1990年7月にアマル・バヤスガラント寺院 (*Amar Baisagalan* [t] *Monastery*) で僧侶を出家させ、さらに1990年10月にはウランバートルにトグス・バヤスガラント在家女性仏教徒協会 (*Tugsbaisagalant Lay Women Buddhist Organization*) と尼僧院を設立し、「モンゴル国で初めて」のゲツルマ (沙弥尼) を出家させたという (“*The Pethub Buddhist Institute*” パンフレット)。ペトゥブ寺院 (*Pethub Monastery*) は、ラダックで800年の歴史を持つバクラ・リンポチェの同名の寺にちなんで名づけたものであり、厳格な持戒をする男性

の僧侶の育成機関となっている（D. Choijamts 2008: 46; P. Ochirbat 2008: 58; Sonam 2008: speech）。さらに、リンポチェは、モンゴル国における古い僧院の再開や新たな僧院の設立にも関与・協力した（D. Choijamts 2008: 45; G. Luvsantseren 2008: 79）。



【写真③ ペトupp寺院】

また、リンポチェの尽力により、多数の若い僧と数名の尼僧が仏教を学ぶためにインドに留学を果たした（D. Choijamts 2008: 46; Kunze 2008: interview）。インドのダラムサラに派遣されたモンゴル人留学僧の中には、仏教美術を専門とするラマ・G・プレヴバト（Lama G. Purevbat; モンゴル仏教美術学院会長；President of Mongolian Institute of Buddhist Art）も含まれていた²⁶。リンポチェが、チベット仏教の伝統が保全されているインドの出身であり、インドのチベット仏教界にコネクションを持っていたことは、モンゴル国の僧侶たちをインド留学させ、モンゴル国におけるチベット仏教の伝統を回復する上で、極めて意義深かったと考えられる。

2－（5）晩年のバクラ・リンポチェとその役割に対する評価

バクラ・リンポチェは、2000年2月に駐モンゴル国・インド大使の職を退い

た。その後、2003年8月には、すでに病状が極めて悪化していたが、ヒマラヤ山脈の高山地域にある故郷ラダックのレーよりも、第二の故郷であるモンゴル国での療養を望んだ。この最後のモンゴル国滞在中、1930年代に粛清された仏教僧を追悼するためウランバートル郊外に建設中であった仏塔まで、病身を押して自ら訪問し、祈りを捧げた (Sonam n.d.: 84-86; Purevbat 2008: 85)。秘書のソナムによると、「バクラ・リンポチェは、モンゴル国とモンゴル国の人々、モンゴルの開放的で広大な草原、そしてモンゴル国に滞在した10年の間に建設した彼の寺を愛していた」という (Sonam n.d.: 84; 伊藤訳)。その後、重篤な状態のまま、再びインドに移送されたバクラ・リンポチェは、2003年11月4日早朝に息を引き取った (Sonam n.d.: 86-93)。ラダックで葬儀が行われた後、バクラ・リンポチェの遺灰の一部は、モンゴル国にも届けられた。モンゴル国の大統領と首相は、あたかも外国の首脳を出迎えるかのごとく、空港に赴き、その遺灰に付き従って、バクラ・リンポチェの寺まで送り届けたという (Minder 2008: interview)。

本稿で依拠した資料では、その性格上、バクラ・リンポチェに対する批判の言及は少ない。それらの中で、わずかにリンポチェに対する批判に言及した箇所では、リンポチェによるモンゴル国への内政干渉 (Ts. Gombosuren 2008: 66)²⁷ や、モンゴルの慣習に必ずしも合致しないチベットのチベット仏教の伝統の要請 (G. Luvsantseren 2008: 79)²⁸ が示唆されている。特に、後者が示唆している点は、僧侶の持戒（とりわけ妻帯の禁止）にかかわる問題であると考えられる。モンゴル国におけるチベット仏教の伝統の中では、僧侶が独身出家者として厳格な持戒を行うことは、必ずしも重視されてきたことではないため、バクラ・リンポチェやダライ・ラマ14世、FPMTなどの外国のチベット仏教僧・団体が持戒を強調することに対して、モンゴル人の僧侶から「ここはモンゴルであって、チベットではない」といった反発の声も上がっているという (Minder 2008: interview)²⁹。

いずれにせよ、本稿が依拠している資料の偏向性を考慮したとしても、モンゴル国におけるバクラ・リンポチェが、批判を凌駕する人気を博していたこと

は推察できる。バクラ・リンポチェについて批判も勘案した上での総合的な評価は、今後、現代モンゴル国の社会・仏教の慣行に精通した研究者によってなされることを期待したい。

バクラ・リンポチェがモンゴル国仏教復興において果たした数多くの役割の中で、筆者自身の関心から特に注目したいのは、尼僧に対する授戒と育成である。モンゴル国FPMT代表のウエリ・ミンダー（スイス出身の男性）によると、バクラ・リンポチェは「きちんと戒律を守る本物のサンガの存在なしに、仏教がモンゴル国に戻ってくることはない」と繰り返し述べていたという（Minder 2008: interview）。リンポチェは、モンゴル国のサンガ復興に向けて、男性だけでなく、女性に対しても授戒し、男性の僧侶と対等と行かないまでも、仏教徒の宗教実践の中核となる出家者の一員として、女性に一定の役割を認めていたと考えられる。チベット仏教を伝統とする他地域の状況から類推すれば、社会主義政権による宗教抑圧以前のモンゴル国におけるチベット仏教の伝統において、尼僧たちが男性の僧侶と同等の地位と権威を享受していたとは考えにくい³⁰。70年間にわたって否定されてきた宗教活動を復興するにあたって、さまざまな大事業が人々の注目を集めており、地位や名誉に恵まれた人々から常に助言を求められていたにもかかわらず、リンポチェが周縁的な存在である尼僧たちにも目を留め、ジェンダー間格差のある伝統を改革的に復興しようとしていた点は、大変、興味深い。

次節では、インタビューから得た情報を下に、モンゴル国の女性仏教徒の経験に見られる1990年代以降の仏教実践の復興と変容について考察したい。

3. モンゴル人女性による仏教実践の復興と変容

モンゴル国で、「ハンドマ」(*khandma*) と呼ばれる「尼僧」たちの多くは、有髪である。彼女たちは、モンゴルの伝統衣装の形をしたワイン色の僧衣を着用し、尼僧院で、定期的に儀礼を行っている。しかし、彼女たちが守っている戒律は、在家戒の五戒であり、儀礼を行わないときには一般の在家者と同様の服装をしており、彼女たちが結婚して家庭を持つことも許されている。そのため、彼女たちは厳密に言えば、「出家」者には相当しない。このように、家庭生活を

持ちながら、五戒を守り、尼僧院で仏教儀礼を行う尼僧たちは、「ゲネンマ」(*dge-bsnyen-ma*, Skt. *upāsikā*, Pali: *upāsikā*, 優婆夷)であり、伝統的にモンゴルの「尼僧」たちの大半がこのカテゴリーに属するものだったという(Kunze 2008: interview)³¹。チベット仏教では、「ゲロンマ」(*dge-slong-ma*, Skt. *bhikṣuṇī*, Pali: *bhikkhūṇī*; 比丘尼)と呼ばれる具足戒を受戒した尼僧のサンガは伝わっていないとされ、現在のところ、チベット仏教サンガから具足戒を受戒したゲロンマは存在していない³²。しかし、モンゴル国以外のチベット仏教圏では、沙弥戒を受け、「ゲツルマ」(*dge-tshul-ma*, Skt. *śrāmaṇerikā*, Pali: *sāmaṇerī*; 沙弥尼)として、家庭生活を離れて出家・修行生活を送っている例は、多数、見られる(Berzin 2007: website; Tsomo 1987: 120-1)³³。バクラ・リンポチェは、1992年に9名のモンゴル人女性に沙弥戒を授け、ゲツルマとして出家させた。ゲネンマに相当するモンゴル国のハンドマ(尼僧)たちが有髪でモンゴルの伝統衣装の形態の僧衣を着用しているのに対し、ゲツルマたちは、剃髪しており、ダライ・ラマらチベット仏教の僧侶が着用しているのと同じ形態の僧衣を着用している(Kunze 2008: interview)。筆者がインタビューを行ったモンゴル人尼僧クンゼ(Thubten Kunze)師は、1992年にバクラ・リンポチェの授戒によってゲツルマとなった9名のうちの一人であり、そのうちの最年少で、当時17歳であった。



【写真④ 地方で修行を続けてきた104歳の尼僧(右・サキャディター会議開会式)】



【写真⑤】寺院見学を訪れたサキャディター会議参加者を出迎える有髪・剃髪の尼僧（ナル・ハジッド寺）】

モンゴル国の女性たちは、バクラ・リンポチェによる沙弥戒の受戒以前から、仏教実践の復興をすでに始めていた。クンゼは、バクラ・リンポチェによる授戒に先立って、1年半の間をウランバートル郊外にあるターラー（Tara）寺という尼僧院で過ごしていた。ターラー寺は、廃墟となっていた寺をバダムハンド（Badamkhand）というモンゴル人女性が尼僧院として再建したもので、彼女はここに10代前半の身寄りのない少女たち15-20名ほどを引き取り、有髪の少女たちに儀礼や祈祷など宗教生活をさせていた。ここに男児はいなかったという。バダムハンドは、ターラー寺の活動を始める前には、他の女性たちと共にナル・ハジッド（Narkhajid）寺にいたが、廃寺をターラー寺として再建して、そちらに移ることによって、多くの少女たちの面倒を見ることができるようになった。クンゼによると、バダムハンドは、決して経済的に裕福ではなかったが、「心が豊かな女性であり、すべての子どもたちを慈しんでいた」という。彼女は、寺の子どもたちに限らず、困っている人たちには、惜しむことなく食べ物や助言を与えていた。そして、読経や祈祷を行う際に人々から受け取る布施によって、寺の少女たちを養っていた。

クンゼの家族には、経済的な問題はなかったが、ある日、クンゼは学校で同

級生の少女から、ターラー寺についての話を聞き、興味を持ったという。その友人が、「ターラー寺ではとても美しい読経がなされていて、とても美しい修行生活があるので、そこへ行こうと思う」と言ったので、クンゼはその友人に懇願し、ぜひ一緒に連れて行ってくれるよう頼んだ。当時、クンゼは15歳で10年制の小学校の9年生だったが、学校を辞め、家を出て、寺に入ることを決意した。クンゼいわく、彼女の母親は「共産主義の影響を強く受けていた」ので、クンゼの新しい人生を認めてくれなかった。また、同じ学校の友人は、小学校の卒業証書をもっておくべきだと主張したが、クンゼは「これから新しい知識について学ぶので、小学校の卒業証書は必要ない」と説明した。ターラー寺に入った後、クンゼは、バクラ・リンポチェから沙弥戒を授戒するまでは、特に戒律を受けることもなく、ターラー寺で有髪のまま、読経・祈祷・掃除などを行い、「尼僧」として過ごした。クンゼによると、少女たちは、皆、幼かったので、寺で行っていることが何なのか理解していなかったが、単にそれが「良いこと」であることだけは分かっていた。彼女たちは「皆、とても美しく、とても賢かった」という (Kunze 2008: interview)。

バダムハンドは、やがて韓国とのつながりを深め、ターラー寺の少女たちを韓国に送り、韓国仏教の瞑想や思想、韓国語、コンピューター技術などを学ばせるようになったという。韓国仏教はモンゴルの仏教伝統とは異なっているため、クンゼは、モンゴルと同じチベット仏教の伝統に即した仏教教育を受けることができるインド留学を選んだ (Kunze 2008: interview)。バダムハンドは、2000年8月にモンゴル国で本格的な活動を開始した FPMT のスタッフにコンタクトし、ターラー寺を FPMT に譲渡して、韓国に移住した³⁴。FPMT は、2001年4月にターラー寺を「ドルマ・リン寺」(Dolma Ling Temple) と改称し、新たな尼僧院として、モンゴル人尼僧の教育と、地域の貧しい住民向けの社会奉仕活動を展開している (Minder 2008: interview)³⁵。現在、ドルマ・リン寺には、14名のモンゴル人尼僧 (全員ゲツルマ) が居住しており、FPMT が招聘したフランス人・ネパール人のチベット仏教の尼僧が師となって、モンゴル人尼僧の教育に当たっている (Chantal 2008: interview; <http://www.fpm.org/>)

mongolia/nunnery.asp)。



【写真⑥ ドルマ・リン寺】



【写真⑦ ネパール出身の師僧（左）と16歳のモンゴル人尼僧（右）】

ターラー寺にいた少女のうち、クンゼともう一人の少女は、ナル・ハジッド寺の二人の少女とともに、1992年にバクラ・リンポチェから沙弥戒を受けた後、さらに仏教教育を受けるため、インド留学に派遣された。これら4名の若いモ

ンゴル人ゲツルマたちは、バクラ・リンポチェの紹介により、まず、インド・ダラムサラにある Jamyang Foundation で学んだ³⁶。クンゼは、Jamyang Foundation で3年間学んだ後、さらに同じダラムサラにある「仏教弁証法学院」(Institute of Buddhist Dialectics) で学んだ³⁷。クンゼは、1994年から2007年までの13年間、インドで仏教を学び、モンゴル国に帰国した。同じ年にインドに留学した4名のモンゴル人尼僧の中で、クンゼ以外の3名は、還俗して結婚し、出産しており、今日までゲツルマとしての出家生活を送っているのは、クンゼのみである (Kunze 2008: interview)。

クンゼは、モンゴル国帰国後、ウランバートルの名刹ガンダン寺や「モンゴル仏教センター」(The Center of Mongolian Buddhists) で、チョー (*chöd, gcod, cho*) と呼ばれる儀礼を行ったり、僧侶や一般の人々に対し仏教の教えを教授したりしている³⁸。また、クンゼは、2007年には、クンゼ自身や少年僧による読経と大衆音楽の歌手による歌を組み合わせた仏教の「コンサート」を行った。このコンサートでは、特に高齢者の入場を無料としたため、多くの人々が来場した。歓喜した来場者は夜10時ごろまで4時間にわたって会場に留まっていたという (Kunze 2008: email correspondence)。クンゼは人々に対し、仏教の教えにある「苦しみを乗り越え、心の安らぎを得ることができる方法」を伝え、多くの人々がこれに感銘を受けたという。クンゼによると、「現代の人々は常に何かを考えて苦しんでいるため、一時的にでも苦しみから解放される経験をすることによって安堵できる。仏教の教えは、彼らにとって非常に有用である」という。また、モンゴル国では、多くの僧侶や尼僧が読経や祈祷に際し、布施の授受を期待するが、この「コンサート」は無料であったため、多くの人に好評を博した。クンゼは、これを機に人々に知られるようになり、CD も制作したという (Kunze 2008: interview)。

民主化後、宗教活動が自由化されたモンゴル国には、モルモン教、カトリックなど、多数のキリスト教団体が到来し、食事や住居、カウンセリングなどの無料提供を行っている。そのため、今日のモンゴル国では、「クリスチャンは与え、仏教徒は取る」(“The Christians they give and the Buddhists they take”)



【写真⑧ サキャディター会議参加者見学の際に尼僧たちによって行われた儀礼
(ナル・ハジッド寺)】



【写真⑨ 儀礼に使用された楽器】

と言われ、人々の布施によって生きる出家者の存在を必ずしも肯定的に受け止めない傾向も存在しているという (Minder 2008: paper)。サキャディター会議に参加し、通訳を介して積極的に発言していたモンゴル人在家女性仏教徒ら (通訳の説明によると、彼女らは学校教員や仏教団体の要職を務める有識者) は、貧しい人々が無料の物品・サービス提供を魅力に感じてキリスト教に改宗

することに対し、強い危機感を示していた。70年間にわたる断絶の後に迎えたモンゴル国の仏教「復興」は、必ずしも伝統的実践形態の忠実な「再現」がなされているのではなく、新たな社会条件に対応して展開しているといえよう。

モンゴル国の尼僧たちが経験している仏教復興と変容の中で、特に次の二点に注目したい。第一の点は、沙弥戒を受戒した尼僧ゲツルマの一定の増加である³⁹。旧来の有髪の「尼僧」は、家庭生活を維持しながら宗教儀礼を行っており、彼女たちは、「出家」と「在家」の中間的な存在であったといえる。モンゴル国の尼僧たちの状況を、モンゴル国外におけるチベット仏教の尼僧たちの状況と比較すると、ドラムサラのチベット人コミュニティやブータンなどにおいては、女性が沙弥戒を受けてゲツルマになることには支障がなく、チベット仏教を実践する西洋人女性たちが、サキャディター会議等を通じて訴えているのは、チベット仏教サンガによる比丘尼＝ゲロンマの認定である。言い換えれば、国際女性仏教徒の運動は、モンゴル国で生じている変化（沙弥尼＝ゲツルマとしての出家）よりも、さらに一段階上の地位（比丘尼＝ゲロンマ）を求めているということになる。今回、モンゴル国で行われたサキャディター会議では、1990年以降のモンゴル国で徐々に拡大しつつあるゲツルマとしての出家について特に強調されることはなかったが、モンゴル国における女性仏教徒にとって、これは一つの新たな変化であると考えられる。

今回のサキャディター会議期間中に、インタビュー等を通じて筆者が知ることができた事柄は、極めて限られたものではあるが、出家者としての人生を志すモンゴル国の女性仏教徒が、沙弥戒を受戒し、そしてゲツルマとなることには、彼女たちの期待感とともに現実的な困難が伴っていることが伺えた。クンゼによると、彼女が1992年にバクラ・リンポチェから沙弥戒を受けた頃、「多数の女性たちがバクラ・リンポチェに、きちんとした戒律と仏法の原則を求めているのを見た。それ故、リンポチェは私たちに戒律と教育の機会を授けてくれたのだと思う」という（Kunze 2008: interview）。ここから、バクラ・リンポチェによる沙弥戒の授戒は、仏教復興を支える「サンガ」の復興を重視したリンポチェの意図であっただけでなく、少なくとも一部の女性たちの希望に応

えたものであったと考えられる。しかし、クンゼの言葉からは、男性の僧侶と比べると、尼僧に期待される宗教儀礼等の機会は乏しく、家族からの経済的支援なしに、出家生活を維持することは困難であることも伺えた。在家仏教徒による経済的支援なしに、出家者が厳格な出家生活を維持することは困難であるため、ドルマ・リン寺のゲツルマたちのように、FPMTのような海外の仏教団体による支援が保障されているケースを除けば、在来の有髪の尼僧として、家庭生活を送りながら宗教実践を行う方が、現実的であることも想定できる。今回、門外漢の筆者が見聞したわずかな情報をもって、モンゴル国の尼僧たちの現状を断定的に結論付けることは困難であるため、モンゴルやチベット仏教を専門とする研究者による厳密な研究を待ちたい。

第二に注目したい点は、モンゴル国で途絶えていた仏教の伝統の復興が、旧来のローカルな宗教実践の「復元」という側面を持つとともに、モンゴル国外で受け継がれてきたチベット仏教の伝統をモンゴル国に再移植する形で復興されているという点である。バダムハンドら女性仏教徒による読経や祈祷などの宗教実践は、公然とした宗教実践が許されていなかった70年の間に、公権力による監視が行き届かない場で継承されてきた宗教実践が、1990年以降、顕在化したことを推測させる。それは、さらにモンゴル国各地の寺院を訪問していたインド大使の活仏バクラ・リンポチェの知るところとなり、クンゼらの受戒、インド留学につながっている⁴⁰。バクラ・リンポチェのようにチベット仏教の伝統を体現する外国人活仏や、クンゼのようにチベット仏教の伝統を保持しているダラムサラで学んだ留学経験者、さらにはFPMTを通じてモンゴル国に派遣されたチベット仏教を実践・信仰する外国人らの存在は、モンゴル国の人々が失っていた教理解解やスピリチュアリティ経験の機会の回復に、重要な貢献をしていると考えられる。外国で継承されてきた「伝統」の再移植に際して、さまざまな文化摩擦が生じたとしても決して不思議ではないが、モンゴル国の人々がグローバル化したチベット仏教の「普遍性」に共鳴し、そこに彼らの人生の指針となる宗教性を見出すならば、それも、単なる仏像や寺院の再建に留まらない、生きた仏教の復興の一側面であるといえよう。

結びにかえて

本稿は、表題に掲げたテーマについて、決して全面的に明らかにできたわけではない。筆者の極めて限られた知見によって、本稿で取り上げた人々が体現しているスピリチュアリティと経験が、その舞台となる地域の歴史、宗教の伝統や教理、日常的な宗教実践と、どのような一体性を持って結びついているのかについて、ここで明快に解き明かすことができたとは言い難い。恐らく、筆者がアクセスすることができた資料およびインフォーマントの性質上、モンゴル国仏教復興に関するさまざまな事象の中でも、とりわけ外国人・留学経験者が関与している側面に焦点が絞られたのであり、社会主義時代に水面下で継承されてきたと考えられるモンゴル国の人々の宗教実践の側面を十分に明らかにすることはできていない。

これまで、筆者は、モンゴル国とほとんど接点がなかったが、2008年7月には同国がサキャディター国際女性仏教徒会議の開催地であったため、その仏教と尼僧たちの世界へと導かれた。しかし、モンゴル語は言うに及ばず、モンゴル国やチベット仏教の歴史や教理についてほとんど何の知識もないまま、わずか10日間、国際会議と仏教関連のツアーに参加し、英語を話す限られた人々と接したのみで、表題に掲げたテーマを全面的に理解し、論述することは、もとより困難であるといえよう。にもかかわらず、専門のフィールドとするタイで調査するときと同様に、図書館・文書館にない資料や人々の語りから、文学や歴史学の対象とならない現代仏教スピリチュアリティの社会史の一側面を描き出そうと無謀な試みをしたに過ぎない。

筆者の力量不足のために生じたであろう不正確・不的確な記述については、専門家の厳密な検証を受けなければならない。そして、仮に本稿が取り上げた現代史の一側面が専門家の関心を喚起するものであるならば、未だ十分に光の当たっていない歴史が、より正確に、いっそうクリアな形で描き出されてほしいと思う。

《謝辞》

本稿の執筆に当たっては、本学の萩原守先生（モンゴル法制史）にモンゴル国の歴史全般、一部のモンゴル文字で書かれた資料、モンゴル語の発音・日本語表記について、また大谷大学の三宅伸一郎先生（チベット学）には、チベット語用語の意味や発音・日本語表記に関するアドバイスをいただいた。また、University of Calgary（カナダ）の Yumi Onozawa 氏には、チベット仏教と女性に関して解説していただき、いくつかの参考文献・映像資料を紹介していただいた。筆者の専門外であるテーマについて、これら3名の先生方からのご教示を受け、新たに学ぶことはとても楽しい経験であった。先生方には心よりお礼を申し上げたい。ただし、本稿に事実誤認・不適切な解釈等が見られる場合は、すべて筆者の責任であり、萩原先生・三宅先生・Onozawa 氏にその責任が帰せられるものではない。

注

- 1 『朝日新聞』夕刊（4版）、2008年7月2日、9頁。
- 2 一連の会議と市内寺院ツアーを終えた7日夜、モンゴル政府関係者がホテル・モンゴリアを訪れ、海外からの会議参加者に対し、開会式の舞台裏について説明を行った。その説明によると、開会式では、モンゴルを代表する女性政治家であるオヨンをはじめ、3名の女性大臣が出席してスピーチを行う予定であったが、暴動の波及を避けるため、急遽、取り止めとなった。また、開会式ではモンゴル音楽のオーケストラによる演奏が予定されていたが、暴動の影響からオーケストラの規模を大幅に縮小せざるをえなくなったことが明かされた。放火により、モンゴル音楽の貴重な楽譜も焼失したという。
- 3 これまでのサキャディター会議での議論は、カルマ・レクシェ・ツォモ編著（Tsomo 1988, 1996, 1999, 2004a, 2006, 2008）およびサキャディター協会ウェブサイト（<http://www.sakyadhita.org/>）などから知ることができる。2007年7月には、サキャディター協会の主要メンバーでもある西洋人のチベット仏教比丘尼が中心となって、ドイツのハンブルクで国際会議 International Congress on Buddhist Women's

Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya, and Ordination Lineages を開催し、ダライ・ラマ14世によるチベット仏教比丘尼サンガ創設の裁断を求めた。ハンプルクでの会議についての詳細は、同会議ウェブサイト (<http://www.congress-on-buddhist-women.org/>)、岩本 (2008)、伊藤 (2008) 参照。

4 2002年 (台湾)、2004年 (韓国)、2006年 (マレーシア) に開催されたサキャディター会議で筆者が報告したペーパーは、それぞれ(Ito 2004, 2006, 2007)として出版した。また、サキャディター会議参加以前には、タイの女性修行者メーチャーに関する論文 (Ito 1999) も刊行した。

5 例えば、金岡 (1993: 270-275)、菅沼 (1996, 2004: 3-55)、バドバヤル (1998)、中村 (1998, 1999) など。

6 バクラ・リンポチェに関する2点の資料は、彼がウランバートルに創設したペトゥブ(Pethub) 寺院にて入手したものである。これらの資料の著者ないし編者であるソナム・ワンチュクは、晩年のバクラ・リンポチェの個人秘書・助手としてリンポチェに最も身近に仕えた人物であり、リンポチェが駐モンゴル国大使を務めた間も、ともにモンゴルに滞在した。ソナムの経歴およびバクラ・リンポチェとの関係については、(Sonam n.d.: 13-16) 参照。本稿で参照している英文の文献は、最近、刊行されたものであるため (ソナムによるバクラ・リンポチェの伝記の刊行年は不明だが、同書66頁でN・エンフバヤル氏の大統領選出に言及しているので、恐らく2005年以降に書かれたものと思われる。リンポチェ生誕91年記念文集の刊行は2008年5月である)、恐らく未だ研究者に知られていないと考えられる。これらは、リンポチェがモンゴルの仏教復興において果たした役割の大きさを示す重要な資料であり、モンゴル国の仏教復興に関する研究の端緒としてまず参照されるべきものといえる。なお、バクラ・リンポチェの生誕91周年記念文集に関しては、英文のみを参照した。本稿における同書からの引用は、すべて英文からの和訳である。ただし、モンゴル人著者による英文の寄稿には、“Unofficial translation” と記されているので、恐らくモンゴル語文で寄稿されたものを文集編者が英訳し、著者による訳文の確認・点検を経ることなく刊行したものと思われる。

7 ただし、ロッサビは、別の箇所でも、バクラ・リンポチェの役割に言及した上で、

「翌年（2000年—伊藤補足）バクラは病によりモンゴルを去り、2003年に死亡したが、その頃までにモンゴル仏教は、チベットのような劇的な進展ではないものの一定の復興を果たした」という評価もしている（ロッサビ2007：255）。

- 8 1990年3月から1997年6月までモンゴル国大統領を務めた P・オチルバト (P. Ochirbat) 氏は、バクラ・リンポチェ生誕91年記念文集に寄せた文章の中で、次のように述べている。「1990年の末までにはほぼ50寺の僧院が再開し、通常の機能を許されていた。また、僧侶の数も約1,000人にまで達していた。しかし、互いに相反する国家の規制が存在しており、僧院の機能を規制することは容易なことではなかった。実に、モンゴル国に民主主義が導入されたとき、僧院は無秩序な状態だったのである。僧侶たちも僧院も、宗教活動を行う上で多数の困難に直面した。誰もが認めるようなモンゴル仏教徒のリーダーは存在していなかった。この微妙な問題の解決は重要性を帯びていた。なぜなら、僧院の独立した機能には多数の規制が存在していたからである。それ故、新政府は前政権によって創設された宗教評議会 (the Council of Religious Affairs) を解散することを決定した。かつての宗教評議会は、大統領顧問によって指導される宗教評議会に代替された。この措置に続き、さらにはモンゴル国憲法に国家と宗教の関係にかかわるいくつかの原則が盛り込まれた。宗教と僧院に対する国家の方針を定式化して表明し、信教の自由とモンゴル古来の文化的遺産の保全を保障する法律を制定する必要が感じられていた。この仕事は、モンゴル国大統領の指導の下で達成された。この重要な作業を貫徹する間、我々はバクラ・リンポチェの指導と分別ある助言を得ることができたのである。」 (P. Ochirbat 2008: 57; 伊藤訳)ここに示された点は、民主化後のモンゴルにおける宗教政策の転換を考える上で、極めて重要であると考えられる。

- 9 元モンゴル外相 Ts・ゴンボスレン (Ts. Gombosuren) によると、彼がモンゴル語で話したことをモンゴル側通訳の Y・オトゴンバイル (Y. Otgonbayar) が英語に翻訳し、リンポチェ側通訳のソナム・ワンチュクがラダック語 (Ladakhi) またはヒンディー語に翻訳して、コミュニケーションをとっていたという (Gombosuren 2008: 65)。また、リンポチェが地方を巡回するときには、インドのドラムサラに留学した経験があり、チベット語に堪能なモンゴル人僧ハンボラマ・チョイジャム

ツ (Khambolama Chojamts) とラマ・グンサンポ (Lama Gundzamgpo) が通訳を行っていたという (Sonam n.d.: 63; D. Chojamts 2008: 47)。

- 10 19世紀初頭、モンゴルで仏教が繁栄のピークを迎えていた第8世ジェブツンダンバ・ホクホトすなわちボグド・ゲゲーン (8th Jebtsundamba or Bogdo Gegeen) の治世に、ある一人のモンゴル人の僧侶が敵対勢力による仏教の破壊を予言していたという。さらに、その予言は、仏教破壊の後、「インドの羅漢バクラ (Arhat Bakula)」がモンゴルに来て仏教を復興すると述べていた。モンゴルの高名な学者ザワ・ダムディン (Zawa Tamdin, Lobsang Tayang, 1867-1937) が作った羅漢バクラを讃える祈祷文は、モンゴル中の寺院で詠唱され、羅漢バクラを中心に据えたモンゴル独特のタンカ (チベット仏教の軸装仏画) が寺院や家庭で飾られるようになったという。バクラ・リンポチェの秘書であったソナムは、モンゴル国立大学のモンゴル語教師 D・ダンバ (D. Damba) からモンゴル語教授を受けていた際に、羅漢バクラを中心に、ブッダを最上部に据え、15人の他の羅漢に取り巻かれているユニークなタンカ (通常のタンカでは、16人の阿羅漢が中央のブッダを取り巻いている) がダンバの自宅にあることに気づき、このタンカの経緯について質問したところ、この「予言」の存在を知ったという。ダンバの父は、強制還俗を経験した元僧侶で、彼のタンカは父から彼の家族へと伝わったものであるという。1930年代、羅漢バクラの到来を待ちわびていた人々は、バクラ・リンポチェの到来を熱狂的に迎えたソナムは述べている (Sonam n.d.: 58-59)。一般的なチベット仏教美術における十六羅漢の図像については、田中 (2001: 109-112) 参照。

- 11 *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche* (Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center, 2008) には、晩年のバクラ・リンポチェの秘書を務めた Sonam Wangchuk Shakspo のはしがきの他、順に、サキヤ・ティジン (H.H. Sakya Trizin; チベット仏教サキヤ派貫主)、ティチャン・リンポチェ (H.H. Trijang Rinpoche; ダライ・ラマ14世の補佐教師)、エンフバヤル、チョイジャムツ、P・オチルバト、ゴンボスレン、ロプサンツェレン (G. Luvsantseren; モンゴル仏教研究所所長)、ラマ・G・プレバト (Lama G. Prevat; モンゴル仏教芸術研究所会長)、ウエリ・ミンダー (Ueli Minder; モンゴル FPMT [大乘仏教保全協会] 代表)、

Guido Verboom（モンゴル芸術評議会プロジェクト顧問）の10名が寄稿している。

寄稿者それぞれの原稿が英文とモンゴル語文の二言語で収録されている。

12 “For us Bakula Rinpoche was no foreigner, he was our Guru” (Chojamts 2008: 46).

13 以下、バクラ・リンポチェの経歴に関する記述は、主として、彼の晩年の秘書として活躍したソナム・ワンチュクが著した英文の伝記 *Sonam Wangchuk Shakspo, Bakula Rinpoche: a visionary lama and statesman* (New Delhi: private publication, n.d.) に依拠している。ソナムがこの伝記に盛り込んだ多数の興味深いエピソードの中から、特にモンゴル仏教の現代史として興味深いと考えられる点を取り上げた。

14 元モンゴル外相ゴンボスレンは、モンゴルでは極寒の2月ですらも、バクラ・リンポチェは僧衣のままであり、場の公式・非公式の別にかかわらず、僧衣以外の服装を用いたのを見たことがないといっている (Ts. Gombosuren 2008: 65)。

15 ソナムによると、長期にわたり、バクラ・リンポチェは、ソ連に入国することができた唯一の高僧だったという (Sonam n.d.: 8)。

16 “The Website of The Office of His Holiness the 14th Dalai Lama” には、2004年から2008年のダライ・ラマの外国訪問に限って掲載されている (<http://www.dalailama.com/page.106.htm>) が、BBC Newsのウェブサイトでは、その後、2002年、2006年に、ダライ・ラマがモンゴルを訪問した際の報道記事が見られる (<http://news.bbc.uk/>)。エンフバヤルによると、「ダライ・ラマ」という語が「智慧の大海」を意味するモンゴル語であり、モンゴル人の君主アルタン・ハーン (1507-82) によってチベット人のダライ・ラマ4世に授けられた称号であることから、ダライ・ラマがモンゴルとモンゴル人に対して特別な気持ちを持っていることをモンゴル人ならば誰でも知っている」と述べている (N. Enkhbayar 2008: 36)。

17 ソナムによるバクラ・リンポチェの伝記の中では、すでにバクラ・リンポチェがインド大使としてモンゴルに駐在していた1991年のダライ・ラマ14世のモンゴル訪問の際のエピソードについてのみ言及されており (Sonam n.d.: 76-78)、バクラ・リンポチェがすでにモンゴルなど社会主義圏のチベット仏教徒と構築していたネットワークと、ダライ・ラマのこれらの国への訪問実現との具体的な関連については

明らかにされていない。ソナムによるバクラ・リンポチェの伝記の中では、ダライ・ラマのモンゴル訪問の年が「1992年」となっているが、「ダライ・ラマ法王日本代表部事務所」ウェブサイト中の「ダライ・ラマ法王の外国訪問1967-1999」には、1992年にモンゴル訪問の記録はないので、恐らく「1991年」の誤りであると思われる (http://www.tibethouse.jp/dalai_lama/hh_overseas.html)。

18 バクラ・リンポチェは、チベットと中国の問題についても、関心が高かった。ソナムによる伝記は、1955年（すなわち1950年の中国人民解放軍によるチベット侵攻、1951年の十七か条協定締結などがなされた後であり、チベットの周縁部で中国政府による実効支配が始まろうとしていた時期）、当時ジャンムー・カシミール州の大臣を務めていたバクラ・リンポチェがラサを訪問し、インド議会でこの問題について発言するなど、インド政府に対しチベット問題に関する働きかけを行ったと記している (Sonam n.d.: 55-57)。このほか、1986年に、ネパールのカトマンドゥで開催された世界仏教徒協会 (World Fellowship of Buddhists; 略称 WFB) の機会に、中国に留まったチベット仏教の高僧パンチェン・ラマ10世 (the 10th Panchen Lama Chokyi Gyaltzen) と対談したときのエピソード (Sonam n.d.: 51-54)、1996年にロシア連邦ブリヤート共和国のウラン・ウデで、ロシア仏教徒代表であったハンボラマ・エルデネエフ (Khambolama Erdenyev) の葬儀を同地70年ぶりの葬儀として行ったというエピソード (Sonam n.d.: 49-50)などを収録している。インド大使としてモンゴルに駐在した1990年代の10年間には、彼の外交上の義務として、2ヶ月に1度、中国の北京を訪問し、中国の諸都市でも通訳を介し多くの人々に教えを説いたという (Sonam n.d.: 44-45)。

19 バクラ・リンポチェは、インドがモンゴルに大使館を置いて初めての大使として任命された (ロッサビ2007: 255)。元外相ゴンボスレンによると、1989年には、インド大統領 R・ヴェンカタラーマン (R. Venkataraman) が始めてモンゴルを公式訪問し、モンゴル大統領 J・バトムフ (J. Batmonkh) も15年前の高官派遣の後初めてインドを公式訪問し、二カ国間関係を実質的に強化する協定を締結した。それ故、初の駐モンゴル国・インド大使は、名誉と尊敬のある人物でなければならなかったという (Gombosuren 2008: 64)。バクラ・リンポチェの駐モンゴル国大使任命は

- 1989年ラジヴ・ガンディー首相によるものであった (Sonam n.d.: 60)。その後、インド国会の総選挙が行われ、リンポチェの任命を決定した国民会議派が敗れるという事態が生じ、新インド大使のモンゴル派遣の日程が遅れ、結局、リンポチェがウランバートルに到着したのは1989年12月31日であった (Ts. Gombosuren 2008: 64-65)。ソナムによると、モンゴル政府の方でも、インドが仏教僧を大使として派遣することに對し疑念を持っていたが、ソ連のペレストロイカ・グラスノスチの影響を受け、モンゴル国内の政局全体そのものが急速に変化していったという (Sonam n.d.: 60)。
- 20 ロッサビによると、3月7日のハンガーストライキに際し、「モンゴルで唯一機能していたガンダン寺では最高位の僧が態度を保留していたにもかかわらず、僧侶を広場へ派遣して支援を世に示した」(ロッサビ2007: 54) ことや、3月9日の政治局員全員の退陣表明の後、初めて開かれた国会(3月12日)の際、政府に對し民主主義推進のための提言を行った団体の一つとして、「モンゴル信者連合」を挙げている (ロッサビ2007: 57)。
- 21 エンフバヤル氏の職歴とその在任期間については、(ロッサビ2007: 31)を参照。ソナムは、エンフバヤルが「バクラ・リンポチェと非常に親しい関係にあった」と述べている (Sonam n.d.: 66)。また、リンポチェは、当初、共産圏ではほとんど仕事はないので、インドでは手に入らない貴重な經典を所蔵しているウランバートルの国立図書館でほとんどの時間を過ごすことを楽しみにしていたが、結局、大使としてモンゴルに在任した10年間は、彼の人生のうちで最も忙しくかつ最も生産的な期間になったという (Sonam n.d.: 60, 62)。
- 22 三宅伸一郎氏(チベット学専攻・大谷大学)のご教示によると、ザンギャは、チベットでスンドゥー (*srung mdud*) と呼ばれる「お守り紐」と同じようなもので、一本の紐に結び目があり、そこに加持の力が込められている。
- 23 この大観音像は、チベット語でミクチェー・チェンレーシー、モンゴル語でミグジェド・ランライシクと呼ばれ、「開眼観音」を意味する。元来、ジェブツンダンバ8世の眼病治癒を祈願して建てられたものだったので、このように名づけられた (棚瀬2000: 19)。エンフバヤルによると、この大観音像は1930年代末から1940年代

初頭にソ連に持ち去られたと信じられており、1990年代に入ってから、エンフバイル自身をはじめとする多くのモンゴル政府関係者がモスクワやサンクトペテルブルクでその探索を行ったが見つからず、結局、新たに再建することになった(N. Enkhbayar 2008: 36-37)。また、棚瀬によると、この大観音像の再建は、市場経済導入による極端なインフレによって、モンゴル国民の寄付金の価値が失われてしまうなどの大きな問題を抱えていたにもかかわらず、国民はさらなる寄付の呼びかけに熱狂的に応え、ようやく実現したという(棚瀬2000: 19-21)。再建後の1996年に行われた大観音像開眼式には、P・オチルバト大統領ら要人とともにバクラ・リンポチェも参列した(Sonam n.d.: 64-65)。エンフバイルは、「この大観音像はモンゴル国の完全な独立の回復とこの国の仏教の再興を象徴している」と述べている(N. Enkhbayar 2008: 37; 伊藤訳)。

24 モンゴル国では、1941年に文字改革が行われてキリール文字(ロシア文字)に移行したため(金岡1993: 61)、一般の人々は、伝統的なモンゴル文字で書かれている仏教經典の知識にアクセスしにくいという問題が生じていた(Minder 2008: interview)。FPMTは、15万冊の仏教の本を無料で配布し、テレビ番組で仏教に関する放送を行っている。とりわけ、ダライ・ラマ14世の支持者として知られるハリウッド・スターのリチャード・ギアが導入部に登場し、ダライ・ラマが西洋人に仏教を教える番組は、近代的なモンゴル人の中で人気を博しているという(Minder 2008: interview; cf. 石濱2004: 254)。

25 FPMT モンゴル代表のウエリ・ミンダーによると、ラマ・ゾパ・リンポチェは、1999年、モンゴル人の若者たちの招待により、モンゴルを訪問していた。モンゴルで、バクラ・リンポチェに会うと、ラマ・ゾパ・リンポチェはすぐにバクラ・リンポチェの弟子となった。バクラ・リンポチェは、ラマ・ゾパ・リンポチェに対し、モンゴルで何をなすべきか指示したという(Minder 2008: interview)。また、ミンダーの説明によると、FPMTは、1969年、ラマ・ゾパ・リンポチェとその師ラマ・イエシェ(Lama Thubten Yeshe; 1935-84)がネパールで西洋人たちの要請により瞑想などを指導するようになったことに端を発している。それらの西洋人の弟子たちが、アメリカやオーストラリアなど、それぞれの国に帰国した後、ラマ・イエシェやラ

マ・ゾバ・リンポチェは西洋人の弟子たちの国に招待されるようになった。そこで、ラマ・イエシュは、世界各地にいる弟子たちのネットワーク化を図るため、FPMTの設立を提起した。現在、FPMTのセンターは、30カ国に130ヵ所存在するという(Minder 2008: interview)。FPMTの詳細については、ウェブサイト <http://www.fpmt.org/>参照。

26 タンカ（軸装仏画）などの美しい造形美術は、チベット仏教の寺院に欠かせないものであり、モンゴルにおける仏教寺院の復興において、仏教の知識と美術に精通・熟達した人材もまた不可欠な存在であったと考えられる。ラマ・G・プレヴバトは、インド留学に先立って、ガンダン寺のモンゴル仏教宗教研究所（Mongolian Buddhist Religious Institute）の学生として学んでいた。彼は、より深い仏教の知識と仏教芸術の技能を求め、バクラ・リンポチェにインド留学を願い出、それが聞き入れられたという。インド留学から帰国した後、彼はガンダン寺の大観音像建築の相談役を務めた。その他にも、ウランバートルのペトゥブ寺院にあるすべてのタンカ、また、1930年代に粛清された仏教僧を追悼する仏塔（*stupa*）やバクラ・リンポチェの遺骨を安置する仏塔なども制作したと、バクラ・リンポチェ生誕91年記念文集の中に記している（Purevbat 2008: 84-86）。

27 決してゴンボスレン自身がバクラ・リンポチェを批判しているわけではないが、「残念なことに、何人かの人々はリンポチェがわが国の内政に干渉していると批判した。また、ある『意識の高い』者は、インド大使を『送還する』ことを提案した。しかし、猥下はわが国の歴史や文化に誇りを持つ人々から尊敬され、あがめられ続けた」（伊藤訳）と述べている。

28 ロプサンツェレンも決して自らリンポチェを批判しているわけではないが、次のように記している。「バクラ・リンポチェは、我々の僧侶に深い知識を授け、彼らが澄んだ心を持つことができるようになるため、ウランバートルにペトゥブ寺院を設立した。このユニークな事業は、『僧侶をインド化ないしチベット化させる』ことを目的にしたものではなかった。」（伊藤訳）

29 モンゴル FPMT 代表の Minder によると、ダライ・ラマ14世が、モンゴルの仏教徒に対し、何度も、戒律をきちんと守るよう、要請しているにもかかわらず、ウラ

ンバートル市内の主要な寺院の住職ですらも妻帯しているという。モンゴル FPMT は、僧侶や尼僧に対する財政的・物的支援も行っているが、僧侶が夕方自宅に帰り、自宅で夕食と朝食を済ませてくるならば、寺院で提供するのは昼食のみで済むため、財政的にゆとりがない FPMT としても、こうしたモンゴル人僧侶の慣行を強く否定できないでいると述べている (Minder 2008: interview)。ただし、ペトゥブ寺院では、厳格に持戒しない僧侶は、寺を去らなければならないとしている (Sonam 2008: speech)。

30 モンゴル国外におけるチベット仏教の尼僧については、例えば、Havnevik (1990)、Gutschow (2004) 参照。

31 クンゼによると、モンゴルの女性に初めて “full ordination vows” を授けたのは、ダンザンラブジャー (Danzanravjaa; 1803-56) という僧侶であった (Kunze 2008: interview)。彼はゴビを拠点とし、チョー儀礼 (Chöd) を行うニンマ派の僧侶であったという。一般に、英語で “full ordination” というときには、具足戒を受戒し比丘ないし比丘尼になることを意味しているが、筆者による英語でのインタビューの中で、クンゼは沙弥戒を指して “full ordination vows”、ゲツルマ (沙弥尼) になることを “full ordination” と呼んでいることもあったので、ダンザンラブジャーによる女性への授戒が具足戒であったのか、沙弥戒であったのかは、定かではない。ウェブサイト “Danzan Ravjaa: The Heritage of the ‘Terrible Noble Saint of the Gobi’” (<http://danzanravjaa.org/>) によると、ダンザンラブジャーは、文芸の才能に優れ、代表的なモンゴル民謡ウレムジーン・チャナル (ÜLemjiyin Čnar; “Quality of Greatness”; この歌は女性の性質を讃えたもので、日本で発売されているモンゴル民謡の CD では「気立てのよい娘」と訳されている) をはじめとする多数の詩や歌を残している。彼は満州人によるモンゴル支配、当時の社会秩序、とりわけ厳格な階級・ジェンダー差別を公然と批判し、女性も宗教儀礼に参与させたという。ニンマ派の僧侶は、必ずしも独身での修行生活を送っておらず、ダンザンラブジャーの場合も寺に女性を住まわせ、性的関係を持っていたといわれている。彼は、さまざまな形態の女性のカルトと見られるものを作り、彼の演劇、詩作、絵画の中に女性を取り上げている。このウェブサイトの中では、ダンザンラブジャーによる女性への授戒

については触れられていないが、サキャディター会議でクンゼが報告したペーパーによると、ドルノゴビ県（Dornogobi province）にあるダンザンラブジャーの寺の周辺には、尼寺の跡も残されていると書かれている（Kunze 2008: paper）。また、1995年、ニューヨークで発売された VHS ビデオ “We will meet again in the Land of the Dakini” は、社会主義政権下のモンゴル国でチョー儀礼の伝統を伝えてきたドルジーン・カンドロ・スレン（Doljin Kandro Suren；ビデオ制作当時、80歳代だったとされる）という尼僧の姿を伝える貴重な映像資料である。

32 サキャディター協会は、その目的の一つを比丘尼サンガの復興としている。サキャディター協会会長のカルマ・レクシェ・ツォモをはじめとするチベット仏教を実践する西洋人の尼僧たちは、すでにチベット仏教の「ゲロンマ」（比丘尼）として出家生活を送っており、チベット仏教のサンガによって、その地位が認定されることを求め、運動を続けている。詳細については、International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya, and Ordination Lineages のウェブサイト（<http://www.congress-on-buddhist-women.org/>）参照。

33 チベット仏教が継承する根本説一切有部律（*Mulasarvāstivāda vinaya*）では、比丘尼（ゲロンマ）は364戒の具足戒を守り、沙弥尼（ゲツルマ）は36戒を守る。根本説一切有部では、沙弥戒10戒は36戒に細分化される（Berzin 2007: 3）。

34 ミンダーによると、バダムハンドには二人の娘がおり、そのうちの一人が深刻な病にかかっていたため、韓国で治療を受ける必要が生じた。ターラー寺を FPMT に譲渡した後、FPMT とバダムハンドは、互いに連絡がないという（Minder 2008: interview）。FPMT のウェブサイトによると、ターラー寺の譲渡は2001年4月とある。ドルマ・リン寺についての詳細は、ウェブサイト <http://www.fpmt.org/mongolia/nunnery.asp> 参照。

35 ウランバートル市内にある FPMT の事務所 Mahayana Center で配布されていたパンフレット “FPMT: Compassion in Action” によると、ドルマ・リン寺内にあるコミュニティ・センターでは、2003年8月以降、近隣の貧しい人々に毎日60-80食の食事を供する「スープ・キッチン」（The Soup Kitchen）や診療所、子供向けの道德教育を行うプロジェクトなどを運営している。

- 36 Jamyang Foundation は、サキャディター協会会長カルマ・レクシェ・ツォモがヒマラヤ山脈地域・バングラデシュの女性のために設立した教育機関である。詳細は、ウェブサイト www.jamyang.org 参照。
- 37 Institute of Buddhist Dialectics の創立には、ダライ・ラマ14世もかかわっている。また、ここでは尼僧の教育も行われている。詳細については、ウェブサイト http://www.ibdindia.org/ibd_home.htm 参照。
- 38 クンゼによると、「チョー」という語は、苦痛を与える感情の根源を絶つことを意味する。モンゴルの尼僧・女性仏教徒たちは伝統的にチョー儀礼を中心とする宗教実践に従事し、それぞれの系譜のラマからそれを受け継いできた。その師の中には、俗世から離れ、山中で瞑想生活を送った強力な瞑想修行者もあり、彼らの存在が今日まで語り継がれているという (Kunze 2008: paper)。The Oxford Dictionary of World Religions によると、チョー (chöd) とは、「チベット仏教に顕著な一種の瞑想法で、その起源は修行者マチク・ラブドン (Machig Labdron) と彼女の師バ・タムバ・サンギェー (Father Dampa Sangye) に遡る。その瞑想法は、通常、墓地ないし幽霊の出没する場所で行われる。それらの場所で修行者はマントラ (祈祷の句ー伊藤注)、太鼓、人間の大腿骨で作ったトランペットを用い、自身の身体を切断し、悪鬼に施食することを視覚化する。チョーの正しい実践は、恐怖心の克服、悪鬼も含めすべての生類に対する哀れみの心の深化、修行者があらゆる存在が空であることについての悟りを深めることという3つの目的のために行われる。かつてチョーを行う者は独自の伝統を持つ宗派を形成していたが、その教義は現在主としてカギュ派とニンマ派に吸収されている。(以下略・伊藤訳。引用文中、カッコ内に付記された注記は一部省略した)」(Bowker 1997: 214)。現代モンゴル国の尼僧によるチョーの実践形態がこの辞典の説明に合致するものかどうかについては、さらに研究の余地があるものと思われる。チョーの詳細については Tucci (1980: 87-93)、Gyatso (1985)、Havnevik (2000: 75-8)、Harding (2003) 参照。
- 39 クンゼが受戒して、剃髪し、男性の僧侶と同じチベット風の僧衣を着用した当初は、人々が彼女を「一体何者か、尼僧であろうか」といぶかしげに眺めるため、「外出するのも難しかった」が、今日では、ゲツルマの数が増加し、もはやこうし

た経験をするとはなくなったという (Kunze 2008: interview)。筆者は今回のモンゴル滞在期間中に、バクラ・リンポチェ以降、誰がどこでどのようにして何名のモンゴルの尼僧に授戒し、ゲツルマとさせているのかを把握することはできなかった。しかし、前述の通り、バクラ・リンポチェによる授戒以前には、モンゴルにゲツルマがほとんど存在しなかったという状況を考えれば、現在までにゲツルマの数は一定の増加を見せているといえる。現在のモンゴル国における尼僧の数については、サキャディター会議に参与したモンゴル人尼僧や現地 FPMT スタッフなども正確に把握していない。ゲネンマ・ゲツルマの数を合わせても、モンゴル国における尼僧の数はそれほど多くないものと思われる。ウランバートル市内には、3 箇所の尼僧院があり、そのうち、ドルマ・リン寺では、全員が沙弥戒を授戒したゲツルマである。他の 2 つの尼僧院 (ナル・ハジッド Narkhajid 寺とトグス・バヤスガラント寺 Mongolian Women's Buyani "Tugs Bayasgalant" Centre) では、有髪のゲネンマと少数の沙弥戒を受戒したゲツルマが混在している。地方で活動するハンドマの数については、全く把握できないという (Kunze 2008: interview)。FPMT によるドルマ・リン寺のウェブサイトによると、ドルマ・リン寺には、14名のモンゴル人尼僧が居住している (<http://www.fpm.org/mongolia/nunnery.asp>)。また、不正確な情報ではあるが、サキャディター会議後の寺院ツアーで、これら 3 箇所の尼僧院を訪問した際には、ナル・ハジッド寺とトグス・バヤスガラント寺で儀礼を行っていた尼僧たちの数は、それぞれ20名ほどで、そのうちの大半が有髪のハンドマであり、3～4名ほど剃髪したゲツルマが混じっていた。なお、2000年に刊行された棚瀬論文中の「ウランバートル市内の寺院一覧」という表で「尼寺」と記されている 3 箇所の寺院に所属する僧の数は、ドルマ・リン21名、トグス・バヤスガラント21名、ナル・ハジッド25名となっている (2000: 21)。

- 40 クンゼによると、バクラ・リンポチェはモンゴル各地の寺院を訪問していた際に、ターラー寺にいた少女たちの存在を知ったという (Kunze 2008: interview)。

《参考文献および資料》

(1) 日本語文献

- 石濱裕美子, 1999, 『図説チベット歴史紀行』河出書房新社.
- 石濱裕美子, 2001, 『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店.
- 石濱裕美子編著, 2004, 『チベットを知るための50章』明石書店.
- 伊藤友美, 2004, 「カンボジア仏教：二つの共産主義政権の経験と社会への関わり」『国際文化学』10：17-35.
- 岩本明美, 2008, 「仏教比丘尼戒壇復興と二〇〇七年ハンプルグ国際会議」『南山宗教文化研究所研究所報』18：25-39.
- 伊藤友美, 2008, 「チベット仏教におけるジェンダー間の平等を求めてーダライ・ラマ、西洋人比丘尼、国際サンガと研究者ー」『宗教と社会』14：87-105.
- 金岡秀郎, 1993, 『モンゴルは面白い』トラベルジャーナル.
- 小長谷有紀, 2007, 「モンゴルの民主化十八年と、日本」モリス・ロッサビ（小長谷有紀監訳・小林志歩訳）『現代モンゴルー迷走するグローバリゼーションー』3-19, 明石書店.
- 嘉木揚凱朝, 2004, 『モンゴル仏教の研究』法蔵館.
- 菅沼晃, 1996, 「モンゴル仏教の現状ー弾圧から復興へー」『中央學術研究所紀要』25：25-48.
- 菅沼晃, 2004, 『モンゴル仏教紀行』春秋社.
- 田中公明, 2001, 『タンカの世界ーチベット仏教美術入門ー』山川出版社.
- 棚瀬慈郎, 2000, 「超えるもの、結びつけるものーモンゴル国における仏教リバイバルリズムについてー」『人間文化：滋賀県立大学人間学部研究報告』8：13-28.
- 中村涼一, 1998, 「モンゴル仏教の現状」〔平成9年度密教資料研究所派遣第2回海外密教調査研究モンゴル仏教調査報告〕『種智院大学密教資料研究所紀要』1：61-69.
- 中村涼一, 1999, 「モンゴル仏教・文化調査団、文化班報告書」〔平成10年度密教資料研究所派遣第3回海外密教調査研究モンゴル仏教調査報告〕『種智院大学密教資料研究所紀要』2：94-102.
- バトバヤル, Ts. 1998, 「20世紀のモンゴルにおける仏教について」〔講演記録〕『大

正大学総合仏教研究所年報』20：167-188.

バトバヤル, Ts. 2002. 『モンゴル現代史』 明石書店.

松川節. 1998. 『図説モンゴル歴史紀行』 河出書房新社.

ロッサビ, モリス. 2007. (小長谷有紀監訳・小林志歩訳) 『現代モンゴル―迷走するグローバルゼーション』 明石書店.

(2) 英語文献

Bowker, John, ed. 1997. *The Oxford dictionary of world religions*, Oxford: Oxford University Press.

Chojjamts, D., Venerable. 2008. “Bakula Rinpoche’s contribution to the revival of Buddhism in Mongolia.” In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 44-47.

Enkhbayar, N. 2008. “Bakula Rinpoche: a visionary monk and a statesman.” In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 33-38.

Gombosuren, Ts. 2008. “A pioneer from Jagar (India).” In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 64-66.

Gutschow, Kim. 2004. *Being a Buddhist nun: the struggle for enlightenment in the Himalayas*, Cambridge: Harvard University Press.

Gyatso, Janet. 1985. “The development of the Gcod tradition.” In *Soundings in Tibetan Civilization*, edited by Barbara Nimri Aziz and Matthew Kapstein, New Delhi: Manohar. 320-341.

Harding, Sarah, trans. and ed. 2003. *Machik’s complete explanation: clarifying the meaning of chöd*, Ithaca: Snow Lion Publications.

Havnevik, Hanna. 1990. *Tibetan Buddhist nuns: history, cultural norms and social reality*, Scandinavian University Press Publication.

In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche. (バクラ・リンポチェ生誕91年記念文集) 2008. Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center.

- Ito, Tomomi. 1999. "Buddhist women in *dhamma* practice in contemporary Thailand: movements regarding their status as world renunciates." *Journal of Sophia Asian Studies*. 17: 147-181.
- Ito, Tomomi. 2001. "Discussions in the Buddhist public sphere in twentieth-century Thailand: Buddhadasa Bhikkhu and his world." (A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of The Australian National University).
- Ito, Tomomi. 2003. "Sulak and engaged Buddhists in Contemporary Thai history." In *Socially engaged spirituality: essays in honor of Sulak Sivaraksa on his 70th birthday*, edited by David W. Chappell, Bangkok: Sathirakoses-Nagapradipa Foundation. 241-250.
- Ito, Tomomi. 2004. "New beginnings: the *bhikkhunī* movement in contemporary Thailand." In *Bridging worlds: Buddhist women's voices across generations*, edited by Karma Lekshe Tsomo, Taipei: Yuan Chuan Press. 120-124.
- Ito, Tomomi. 2006. "Ordained women in yellow robes: an unfamiliar 'tradition' in contemporary Thailand." In *Out of the shadows: socially engaged Buddhist women*, edited by Karma Lekshe Tsomo, Delhi: Sri Satguru Publications. 168-171.
- Ito, Tomomi. 2007. "Dhammamata: Buddhadasa Bhikkhu's notion of motherhood in Buddhist women practitioners." *Journal of Southeast Asian Studies*. 38(3): 409-432.
- Kunze, Thubten. 2008. "Buddhist women of Mongolia: many years of history." (a paper presented at the 10th Sakyadhita International Conference on Buddhist Women, Ulaanbaatar, Mongolia).
- Luvsantseren, G. 2008. "My memoirs about H.H. Bakula Rinpoche." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 75-79.
- Minder, Ueli. 2008. "The golden light of Bakula Rinpoche." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 90-92.
- Minder, Ueli. 2008. "Buddhism in contemporary Mongolia, its development and challenges ahead." (a paper presented at the 10th Sakyadhita International Conference on

- Buddhist Women, Ulaanbaatar, Mongolia).
- Ochirbat, P. 2008. "Bakula Rinpoche who left behind a bright influence in Mongolia." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 55-59.
- Purevbat, Lama G. 2008. "A great teacher of Mongolian people." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 84-86.
- Sakya Trizin, HH. 2008. "HH Kushok Bakula Rinpoche." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 11-12.
- Sonam Wangchuk Shakspo. n.d. *Bakula Rinpoche: a visionary lama and statesman*. New Delhi: private publication.
- Sonam Wangchuk. 2008. "Preface." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 6 - 8 .
- Trijang Rinpoche, HH. 2008. "The faithful disciple." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 16-18.
- Tsomo, Karma Lekshe, ed. 1988. *Sakyadhita: daughters of the Buddha*, Delhi: Sri Satguru Publications.
- Tsomo, Karma Lekshe. 1987. "Tibetan nuns and nunneries." In *Feminine ground: essays on women and Tibet*, edited by Janice D. Willis, Ithaca: Snow Lion Publications. 118-134.
- Tsomo, Karma Lekshe. 1996. *Sisters in solitude: two traditions of Buddhist monastic ethics for women*, Albany: State University of New York Press.
- Tsomo, Karma Lekshe, ed. 1999. *Buddhist women across cultures: realizations*, Albany: State University of New York Press.
- Tsomo, Karma Lekshe, ed. 2000. *Innovative Buddhist women: swimming against the stream*, Surrey: Curzon Press.
- Tsomo, Karma Lekshe, ed. 2004a. *Bridging worlds: Buddhist women's voices across*

generations, Taipei: Yuan Chuan Press.

Tsomo, Karma Lekshe, ed. 2004b. *Buddhist women and social justice: ideals, challenges, and achievements*, Albany: State University of New York Press.

Tsomo, Karma Lekshe, ed. 2006. *Out of the shadows: socially engaged Buddhist women*, Delhi: Sri Satguru Publications.

Tsomo, Karma Lekshe, ed. 2008. *9th Sakyadhita International Conference: Buddhist women in a global multicultural community*, Kuala Lumpur: Sukhi Hotu Publications.

Tucci, Giuseppe. 1980. *The religions of Tibet*, London: Routledge and Kegan Paul.

Verboom, Guido. 2008. "Life and work of Bakula Rinpoche." In *In commemoration of the 91st birth anniversary of HH Bakula Rinpoche*, Ulaanbaatar: Pethub Buddhist Center. 97-98.

(3) パンフレット

"Dolma Ling Nunnery."

"FPMT: Compassion in Action."

"FPMT Mongolia."

No title. (Narkhajid Monastery)

"The Pethub Buddhist Institute."

(4) ウェブサイト

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所. 「ダライ・ラマ法王の外国訪問1967-1999」

(http://www.tibethouse.jp/dalai_lama/hh_overseas.html). 更新日不明. アクセス日: 2008年8月13日.

Berzin, Alexander. 2007. "A summary report of the 2007 International Congress on the Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages." (http://www.berzinarchives.com/web/en/archives/approaching_buddhism/world_today/summary_report_2007_international_c/part_1.html). Date last updated on 3 February 2008. Date accessed on 7 August 2008.

“Danzan Ravjaa: The Heritage of the ‘Terrible Noble Saint of the Gobi’” (<http://danzanravjaa.org/>). Date last updated unknown. Date accessed on 7 August 2008.

FPMT Mongolia. “Dolma Ling Nunnery.” (<http://www.fpmt.org/mongolia/nunnery.asp>). Date last updated unknown. Date accessed on 12 August 2008.

FPMT Mongolia. “FPMT Mongolia: Re-igniting Buddhism in Central Asia.” (<http://www.fpmt.org/>). Date last updated unknown. Date accessed on 13 August 2008.

Institute of Buddhist Dialectics. (http://www.ibdindia.org/ibd_home.htm). Date last updated unknown. Date accessed on 11 August 2008.

International Congress on Buddhist Women’s Role in the Sangha, Bhikshuni Vinaya, and Ordination Lineages. (<http://www.congress-on-buddhist-women.org/>). Date last updated unknown. Date accessed on 3 September 2008.

Jamyang Foundation. (www.jamyang.org). Date last updated unknown. Date accessed on 1 September 2008.

The Office of His Holiness the 14th Dalai Lama. “Visits of His Holiness The Dalai Lama Since 1959.” (<http://www.dalailama.com/page.106.htm>). Date last updated unknown. Date accessed on 13 August 2008.

Sakyadhita: the International Association of Buddhist Women. (<http://www.sakyadhita.org/>). The website’s copyright date is 2008. Date accessed on 3 September 2008.

(5) インタビュー、スピーチ、電子メール通信

Chantal. 2008. Interview by Tomomi Ito. Ulaanbaatar. 2 July.

Kunze, Thubten. 2008. Interview by Tomomi Ito. Ulaanbaatar. 4 July.

Kunze, Thubten. 2008. Email correspondence with Tomomi Ito. 12 August.

Minder, Ueli. 2008. Interview by Tomomi Ito. Ulaanbaatar. 6 July.

Sonam Wangchuk. 2008. Welcome speech given to the Sakyadhita conference participants who were visiting Pethub Monastery. Ulaanbaatar. 6 July.

(6) 映像資料 (VHS、DVD)

Allione, Costanzo. 1995. “We will meet again in the Land of the Dakini” [VHS], New York: Mystic Fire Video.

“Naru qajid-un süm-e, qural nom-un tuqai bičileg” (ナル・ハジッド寺、法会についての記録) [DVD], distributed at Narkhajid Monastery.